

(三) 伝染病研究所

血脇他の推挙を得て伝研技手補に採用されここでも外国語学力を評価され編集係となった。翌年、赤痢菌発見者志賀に逢うためマニラより来京したジョンズ・ホプキンス大のサイモン・フレキシナー教授(第四の恩人)が伝研をたずね、野口はその通訳・案内係を命ぜられた。野口の渡米の具体的意志はこの時確定。

(四) 病理学的細菌学的検査術式の出版

渡部医院薬局生時代から手掛けていたカール・フォン・カールデンの著書を和訳し出版した。彼の単行本中唯一日本語の著書で、渡部鼎共著としたのは彼に対する最大の尊敬の現れであった。東歯大保存書の裏表紙には『野口英世君より贈与せらる』八子弥寿平と墨書してあり、兩人の親交を示す貴重な一本である。

(五) 海港検疫所と牛荘への出自

三二年五月、北里の命により横浜海港検疫所に医官補として赴任し、三月後中国人船員からペスト菌を検出して手腕を評価された。その後中国牛荘(現在の営口)でペストが蔓延し、十月には日露の国際防疫団が現地に派遣されることとなり、野口も北里の配慮でこれに加わり牛荘に向かったが、船底の苦力と話して早速中国語を或程度マスターしてしまった。防疫の仕事は半年弱で終わったが土地の有力者に気に入られた野口は更に留まって仕事を続けた間、高給(二八〇—四二〇円)に恵まれ、渡米資金は充分蓄えた筈であった。義

和団の乱のため七月帰国したが、いつもの浪費癖で血脇家の食客となり奥村鶴吉と起居を共にした。

(六) 東京齒科医学院講師としての野口英世

渡米前五ヶ月が新講師としての在任期間であった。病理学薬理学の講義と、アメードー著仏文『齒科法医学』を口述し、奥村がまとめて『歯牙形態学』を学院の教科書とした。

課外講義で『齒科法医学』『咬傷の法医学』他がある。

歯科学報五巻に野口の論文が出た時には、彼はペン大学の一隅で水とパンの粗食に甘んじて、蛇毒の文献を必死に涉っていた。

(平成十六年十二月例会)

史的に見る薬学成立の経過と課題——日本薬史学会創立五十周年に当たって

川瀬 清

一、西欧市民社会における薬系(學術)専門職
 西欧の各地を訪れる度に、農村と際立った対照を見ている都市、そこには中央広場があり、そして市庁舎・教会が置かれ、放射状の道路、また、中心を取り巻く環状道路、時に城壁。それから終着駅型の鉄道など、各都市景観の著しい共通性が甚だ印象的である。これらの都市の大部分は十一世紀頃、既に存在し、今日の都市で当時、影も形も無かったものは、十指で数えられる程度という。

この様な所に生活手段をもって居住する人々は、それぞれギルドを形成し、自己主張、相互の認めあい、時に競合しつつ暮らした。十五世紀のフイレンツェでは、七つの大組合と十四の小組合から成っていたという。

ギルド内では親方・職人・徒弟の階層が区別され、特にドイツでは教育体制が確立し、親方の下で修業を積み、組合が執行する職人試験に合格すると、次は別の親方の下で職人として働かねばならなかった(遍歴)。各職種ごとに規準は異なるものの、一定の要件を満たし、親方試験に合格して初めて晴れて親方になれたのである。

そして薬業でも同じ制度が保たれ、薬剤師(Apotheker)——薬剤師助手(Apgehilfe)——薬剤師徒弟(Ap.Jehrling)の別があり、遍歴も経験しなければならなかった。

薬局には薬品陳列室と、その隣に実験室があり、ここは錬金術を実施する恰好な場所となった。錬金術での操作単位は、加熱・冷却・抽出・濾過・蒸留・昇華などであったが、薬局の研究室では、気体の扱い方を開発し、化学反応の量的把握を可能にした。かくして近代化学の発展が促され、薬局でのハロゲン元素発見が導かれた。フランスの薬剤師モアッサンはフッ素を発見。この功績で一九〇六年にノーベル賞を得ており、当時の研究水準を知ることができる。

二、到来した産業社会での凋落と隆盛

中世以来、製薬面で高水準の科学技術が駆使され、薬を使う面で庶民生活へ身近に貢献してきた薬局も、産業革命の時

代に入って様相が変わり、薬は新生の企業が大量生産するところとなり、その段階で用薬についても規定し、遂に薬局は流通末端での配給機能しか持たなくなつた。二十世紀後半には、抗生物質さらに生物科学由来の薬剤が登場し、生命の根本を揺るがす物質が、情報不足のまま臨床使用され、資本の論理の介入もあり、遂に薬害発生を見るに至つた。

三、日本での医薬制度

明治維新以降、政府の基本方針は西欧的近代化であり、医療面では漢方撲滅であつた。そこで一八七四年に医薬分業・医師の技術評価を内容とする医制を公布した。しかし西欧のような社会的救済の思想も歴史も無い日本では実施できず、一八八四年に内務省は「医師薬舗兼業するも苦しからず」と訓示して政策転換をした(自由開業医制度の始まり)。歴史の目で見れば「薬礼」の形で医療費を考える江戸時代の町医の復活に相当し、民間の活力導入によって日本の医療内容向上に貢献したが、医療機関の役割分担欠如(非システムの)・都市集中そして予防に馴染まず、改革の必要が明らかとなつた。

百年後の一九八五年、「医療維新」つまり、診療内容の監査と地域医療計画を内容とする改革医療法が公布され、以後、総合的医療実施へ向けて歩み出すこととなつた。

四、将来へ向けて

二〇〇四年の日本薬史学会創立五十年は、以上のような歴史の流れに位置付けされる。すなわち、薬史学会創設者・継承

者の努力の上に、今後、長期・大規模に変化するであろう医薬の世界での事象を整理し、未来へ向けての評価を提出することが求められよう。差し当たっては、情報社会の到来という事実を踏まえ、患者志向の発想を中心とした評価規準の導入が考えられる。具体的には、例えば、イギリスの衛生学者ミュア・グレイ著の「患者は何でも知っている」(二〇〇四・中山書店)にある『医療とは患者の発想を軸にした患者と医療技術者との協同事業』をキー・ワードとした薬事問題の探究にならう。

(平成十六年十二月例会)

齋藤茂吉における性

岡田 靖雄

だれにも性欲があり、性事への関心がある。だが、自分の性行動や性事への関心をあからさまにする人はすくない。齋藤茂吉は、そういう面をかなりあからさまにかたり、他人にそれをみせた人である。わたしは精神病医としてのかれの生涯をたどるために、『全集』に公刊されているかれの書簡および日記によって、齋藤茂吉という人間にせまろうとして、『精神病医齋藤茂吉の生涯』(思文閣出版、京都、二〇〇〇年)をかいた。

今回は、そこにみえてきた、かれにおける性のあり方にして報告したい。かれは友人の手紙では、自分の性行動に

つきやや露骨にかたっている。日記では、晩年の愛人だった永井ふさ子にもほとんどふれていない。日常生活や発表された文章では、かなりあけすけな面もあった。

一八八二年に山形県に生まれたかれは、養子候補として一八九六年に遠縁の齋藤紀一にむかえられ、第一高等学校を卒業する一九〇五年に紀一の二女である子の婿養子として齋藤家に入籍した。一九〇五年東京帝国大学医科大学に入学した頃には、性へのつよい関心をしめしていた。かれは自分の自慰についてはかたっていない。初交は一九一〇年末か翌年はじめ、病気で一年おくれた卒業試験をおえた直後である。当時の医学生でも、卒業までは童貞の人がおかつたようである。

当時の精神病学教室は東京府巣鴨病院内にあった。呉秀三院長のもとにあつても、医師には遊蕩人がそろっていたようである(かれのまえの世代がもつとすごかつた)。かれ個人としても、一九一一年から翌年にかけて、女中(？)「おひろ」との、はげしく・かなしい性愛があつた。一九一二年、死病の母を看病しながら(そこから、絶唱「死にたまふ母」がうまれている)、娼妓遊びをして、そのハーモニーを友人にほこりもしている。一九一四年には一三歳下のてる子と結婚したが、父ににて軽躁的なかのじよには別の思い人がいた。「この世で一人のたふとい女人が小生とつれそふたならば」と師長塚節あてにかれがかくの、結婚後三月のことである。

松沢病院医局には、巢鴨時代からの落書き帳三〇冊があつた。そのなかで異色なのが、一九一五年の『卯の花そうし』